

市民公開講座

第7回 子宮頸がん、 検診とワクチン

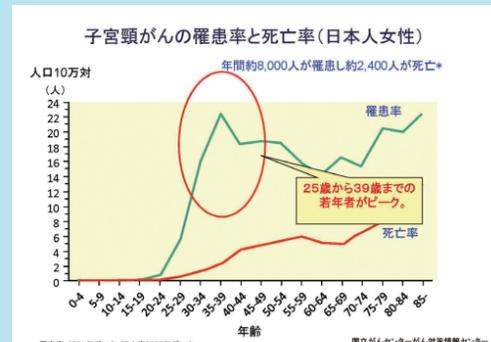
産婦人科
寺井 義人



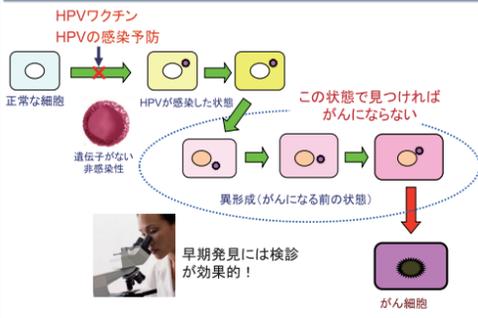
子宮頸がんは、ヒトパピロウイルス(HPV)の持続感染をきっかけに発がんすることが知られています。HPVの感染は一般女性の約80%は経験しますが、その後がんまで進行し

る頻度は、0・15%程度といわれています。また、子宮頸がんは、がんになる前の段階(異形成)で発見することができ、子宮頸がんは、老年期のみならず25から40歳の若年女性にかなりやすい傾向がありますが、若年者の子宮がん検診受診率は低いのが現状です。一方で若年者の子宮頸がんが発症数、死亡数が増加傾向にあることが危惧されています。若年女性の場合、将来妊娠・出産のために子宮温存の可能性を考慮する必要があります。子宮頸がんの前がん状態である異形成や上皮内がんであれば、子宮頸部円錐切除術という局所切除の簡単な手術で治すことができます。また、最近では、本院においても従来は根治術として広汎子宮全摘出術を施行していましたが2cm以下の子宮頸がんであれば、子宮頸部のみを広く摘出する手術(広汎子宮頸部摘出

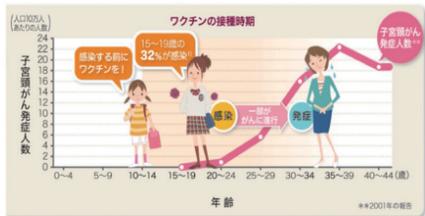
術)を行い、子宮を温存することができるようになっています。しかし、進行した子宮頸がんに対しては、広汎子宮全摘出術のように大きな手術、治療が必要な病気であることは変わりません。さて、子宮頸がんは、子宮がん検診による早期発見・早期治療の時代から2009年に認可されたHPV予防ワクチンにより、予防する時代を迎えるにいたり、このHPV予防ワクチンは、子宮頸がんになりやすい16型、18型に対する不活化ワクチンで、3回のワクチン接種により血中抗体価が上がり、HPVの感染を予防してくれるのです。上述したように子宮頸がんの発生に関



子宮頸がんは早期発見と予防が可能



ワクチンの接種時期



●発がん性HPVに感染する前の10代前半に、子宮頸がん予防ワクチンを打つと、より効果的

とされていることから、HPVの感染を予防できれば、子宮頸がんの発症をブロックすることができ、その有効性については、大規模研究から子宮頸がんの約70%を抑制することができると報告されています。将来このHPV予防ワクチンと子宮頸がん検診が充実すると、子宮頸がん検診が充実したり、子宮頸

がんが原因で命を失うことがなくなることを期待できます。我が国においても、がん撲滅のためにさまざまな問題が提起され、その対策について検討されてきましたが、現状は先進国で子宮がん検診が約70・80%を超えるようになっている中で、日本における子宮がん検診率は、23・7%と低いのが現状です。

今後、子宮頸がんが苦しむ女性がいなくなるように、まずは子宮がん検診の受診率向上のために啓発していくこと。そして、ワクチンによるHPV感染の予防をはかることにより、子宮頸がんの撲滅が期待できると思います。

臨床研究センターご挨拶



臨床研究センター センター長
藤原 保仁

「社会のニーズに応える安全で質の高い医療を皆さまに提供するとともに、良識ある人間性、豊かな医療人を育成する」ことが、大阪医科大学附属病院の理念です。当センターは、新しい薬や医療機器の迅速な開発を倫理的かつ科学的に実施して信頼性の高いデータを提供し、より良い医療をより早く患者さまに提供することを可能とすると同時に、臨床試験に精通する医療人を育成することを目的として平成12年4月に設立されました。皆さまのご協力をいただきながら多くの新薬の治験(人における試験を一般に「臨床試験」といいますが、「くすりの候補」を用いて国の承認を得るための成績を集める臨床試験は、とくに「治験」と呼ばれています。)を施行し、国内における新薬開発に精通した施設としてその地位を確立し現在にいたっております。

この間に医学・分子生物学の進歩もめざましく、病気の原因が次々と明らかにされ、その治療法も日進月歩の勢いで開発されています。また経済・文化のグローバル化が進んでいるのと同様に、新薬開発の分野でもわれわれの予想を超える勢いでグローバル化が進んでいます。すなわち施設(大学・病院)、地域、国の垣根を越え連携して治験・臨床試験が進められており、新薬の開発は単独施設のみではもはや不可能となりました。当センターも、この流れに対応し、さらなる効率的な治験実施体制の整備を行い、臨床治験センターから2013年6月に「臨床研究センター」と改称いたしました。治験は国に新しい薬や医療機器の承認を得ることを目的として行われる臨床試験です。新薬や医療機器の開発プロセスにおいて、ヒトに用いたうえで有効性と安全性を確認する必要があります。このため、患者さまをはじめ多くの方々にご協力をいただかなくてはなりません。臨床研究センターは、患者さまの権利を尊重し倫理性を保った治験・臨床試験が行えるよう活動しております。治験コーディネーターをはじめとする熟練したスタッフが皆さまをサポートします。

各分野のプロフェッショナルが揃う大阪医科大学附属病院の強みを十分に活かし、より一層、治験・臨床試験に力を注ぎたいと考えております。皆さまの健康を希求し、ここ北摂「高槻」から世界に向けて、新しい薬や医療機器の迅速な開発を支援してまいります。ご協力・ご支援のほどよろしくお願いいたします。



看護スペシャリスト
専門看護師・認定看護師の活動

Part 4

がん患者さまの「痛み」をサポートします。

がん性疼痛看護認定看護師 今井 麻里子

がんになった時、20～50%の患者さまはすでに痛みを体験し、進行がんになると75%の患者さまに痛みが出現するといわれています。痛みは身体に苦痛をもたらすだけでなく、QOL(Quality of Life:生活の質)を著しく低下させ、不安がつづることによって心にも大きな影響を及ぼし、患者さまにとって深刻な問題となっていく。しかし、適切に薬を使うことで、70～90%の患者さまの痛みを和らげることができ、さらに、薬以外で痛みを和らげる方法を組み合わせることや日常生活の工夫で、ほとんどの痛みを取り除くことができます。

昨年、私は「がん性疼痛看護認定看護師」の資格を取得しました。それまで婦人科病棟で勤務し、多くの痛みの緩和が困難な患者さまにかかわりました。その中で1人の患者さまとの出会いが大きな動機となりました。その患者さまは、検診のために訪床し、お加減を訪ねるといつも物静かに「大丈夫です。」と答えておられました。ところがある日の深夜、患者さまが眠れないようだったので声をかけると、「本当はね、ずっと我慢していたけど、下腹が痛くてしんどいのです。」とい

われました。そのことを医師に伝え、鎮静薬が処方されました。痛みが取れた患者さまは「嘘みたいに楽になりました。今までは痛みのことばかり考えて、他のことを考える余裕がありませんでした。」と笑顔で感謝の言葉をくださいました。その時に、今まで痛みを我慢しておられたこと、我慢をさせていたのではないのかとあらためて振り返る機会をいただきました。

資格取得後は「がんセンター」への配属となり、入院患者さまは勿論のこと外来通院や在宅療養している患者さまにかかわっています。診断・治療時期から終末期まで、看護専門職として患者さまを全人的に捉え、専門的に学んだ薬物療法の知識も最大限に活用して、少しでも痛みに囚われる時間が少なくなり、その人らしさを取り戻してその人らしい生活を送ることができるようにと考えています。そして、そのことを医療チームとしての活動に繋げ、ご家族とも協働して支援できるように活動しています。

これからもさらに自己研鑽に努め、出逢いを大切にしながら、がん患者さまの「痛み」をサポートしていきたいと考えています。

祝膳

栄養部 管理栄養士 平澤有美子



「おしながき」
赤飯
真鯛のヴァーブル
オードブル
カナッペ
小田巻蒸し
ハニーバターケーキ

本院では、産科に入院されご出産された方に対して、入院中の火曜日、または金曜日の夕食に「祝膳」を召し上がっていただいております。

担当の調理師が1つひとつ心をこめて丁寧に調理しており、使用する食材や献立は季節に合わせたものを取り入れております。一般食とは違った雰囲気、食事とおして栄養課からのお祝いの気持ちをお届けしています。

また、祝膳とともにおしながきを兼ねた「お祝いのカード」も添えています。挟んであるおしながきは取り外せるようになっており、記念の写真が映るようにも工夫してあります。

今後も出産後の大切な想い出の1つになるような「祝膳」を目指します。

情報コーナー

高槻市全域大防災訓練に参加しました

高槻市制施行70周年記念事業として、平成26年1月26日(日)高槻市全域で防災訓練が実施され、本院も災害拠点病院として参加させていただきました。

本院では、地震発生と同時に院内の災害対策本部を立ち上げ、MCA無線を利用して救護対策本部である三島救命救急センターに本院の被災状況や被災者受入可能者数などを報告、救急隊により搬送された被災者を受入れて2次トリアージを実施しました。

本訓練により、受入れ患者の動線の問題や、対応職員の問題など、あらためて考えさせられることとなり、今後の災害対策に役立つ良い機会となりました。